

第 四 回

中学生訪中親善使節団報告書

1995年3月26日～4月2日



財団
法人

Takamatsu International Association

高松市国際交流協会

目 次

I 団員名簿	1
II 日 程	2
III 使節団の活動状況	3
IV 感想文	9

高松市中学生訪中親善使節団団員名簿

団長	岡田正昭	(男)	(勲)高松国際交流協会参事
引率教員	高橋正人	(男)	高松市立桜町中学校教諭
〃	横山和博	(男)	高松市立協和中学校教諭
〃	大屋鋪利子	(女)	高松市立木太中学校養護教諭
団員	光武玲奈	(女)	高松市立桜町中学校
〃	秋山彩	(女)	高松市立玉藻中学校
〃	太田安由美	(女)	高松市立光洋中学校
〃	福田浩利	(男)	高松市立城内中学校
〃	中野大樹	(男)	高松市立鶴尾中学校
〃	中村真依	(女)	高松市立屋島中学校
〃	堀直哉	(男)	高松市立協和中学校
〃	佐々木りつ子	(女)	高松市立龍雲中学校
〃	青木瑠美	(女)	高松市立勝賀中学校
〃	小島由加里	(女)	高松市立一宮中学校
〃	三野奈都子	(女)	高松市立香東中学校
〃	鵜川和之	(男)	高松市立下笠居中学校
〃	田中正隆	(男)	高松市立山田中学校
〃	山地絢子	(女)	高松市立太田中学校
〃	橋本裕子	(女)	高松市立古高松中学校
〃	出石将登	(男)	高松市立木太中学校
〃	中井岳夫	(男)	香川大学教育学部付属高松中学校

日 程 概 要

◎1995年 3月26日(日) ～ 4月2日(日) 8日間

目次	月 日		時 間	日 程
1	3/26 (日)	↑ 北	(~22:30) 9:50~10:00 10:40~21:55	出発式 高松発(大阪・上海経由) 北京着 = 新万寿賓館泊
2	3/27 (月)		(8:45~22:30) 10:20~11:50 14:30~16:30	明の十三陵 万里の長城
3	3/28 (火)	↓ 京	(8:10~21:30) 8:30~9:00 11:00~12:10 14:00~15:15 18:50~21:00	中日友好協会 天安門広場・故宮 天壇公団 北京発 南昌着 = 江西賓館泊
4	3/29 (水)	↑ 南	(8:30~21:30) 10:00~11:00 11:30~13:00 13:30~14:30 15:30~19:00 19:30~	八一起義記念館 南昌市人民政府表敬訪問・歓迎昼食会 滕王閣 第二十二中学校との交流・歓迎夕食会 ホームステイ
5	3/30 (木)		(8:30~19:50) 9:00~13:00 14:40~17:30 19:30~	第三中学校との交流・歓迎昼食会 第二中学校との交流・歓迎夕食会 ホームステイ
6	3/31 (金)		(7:50~19:30) 9:20~10:30 13:30~15:00 16:40~	八大山人記念館 第一職業学校との交流 南昌発 車中泊
7	4/1 (土)	↑ 上	(7:50~19:35) 9:00~10:00 11:00~11:40 13:30~15:00 16:00~	上海着 玉仏寺 豫園 黄浦公園・南京路 上海工業展覽中心 = 日航龍柏飯店泊
8	4/2 (日)	↓ 海	(7:45~) 9:00~10:00 12:20~19:10	上海動物園 上海発(大阪経由) 高松着

使節団の活動状況

3 / 26日 (日)

・高松－北京

心配された昨日からの雨もあがり、高松空港ロビーで大勢の関係者に見送られ、定刻に離陸。アッという間に関西空港に到着した。出発までかなりの余裕があったので、昼食後は自由時間をつくり新空港内を見学する。

中継地の上海空港の入国審査では、言葉が通じなくて戸惑っていたところ、関西空港から同乗した観光団のガイドさんに助けられた。

上海は晴れ、しかも、ここ数日は最高気温15℃と格別に暖かいという。空港ロビーで既知の南昌市人民政府外事弁公室の曾建民さん、同市教育委員会の涂志輝さんたちの温かい出迎えを受け、ホテルに着いたのは現地時間で午後10時30分だった。

3 / 27 (月)

・北 京

午前中は明の十三陵を見学する。十三陵へ至る参道の両側に大きなポプラ並木が続き、芽吹いたばかりの薄茶の若葉が美しく、ところどころにカササギの巣が架かっている。

見学の許される定陵の地下宮殿に入ると、大理石づくめの壮大さに驚かされる。中国の歴代創業の天子の中でただ一人純粹の庶民出身ということで、後世に権威を誇示するために13もの巨大な陵墓を築いたのだろう。

午後は万里の長城を訪ねる。外敵の侵入を防ごうと、外壁は内壁より一段と高くしており、かつ堅固である。1日に2～3万人が観光に来るとあって、随分混雑し、土産物売りの人たちも積極攻勢でなかなか放してくれない。全長は約6000 kmもあり、北海道から九州までの距離に相当するから「人口衛星から見え、人類史上最大の建造物」であることが納得できる。元気な生徒は急傾斜の男坂だけに飽き足らず、女坂へも往復する。市街地に帰ると再び自転車が溢れ、街中に張り巡された運河の流れのように見えた。

3 / 28 (火)

・北京－南昌

朝一番は中日友好協会を表敬訪問して、かつて団長として来高された吳瑞鈞副

秘書長さん、高松市で研修されたことのある王慶英さんにお会いする。高松市長のメッセージを伝達。呉さんは中華日本学会理事も務められ、日本の諺を織り混ぜ流暢な日本語で生徒に学習塾の様子を尋ねられると、生徒も具体的に例をあげテキパキと応答した。



次に明、清の皇帝が五穀豊穡を祈ったという天壇公園を見学。その年の豊作に大きな影響を与える日、水、土といった神々を祭って **ガイドの説明に聞き入る団員（天壇公園）** いる。昨年は高松市をはじめ日本中が渇水で悩まされたので、まず一番に、水の神に早明浦ダム上流部の恵みの雨を祈願する。

故宮が近づくと崩れかけた城壁が現れる。外城の壁跡で、この内側が内城で天安門から中心の故宮へと続く。故宮は広大で夥しい数の殿閣と部屋を一望するだけで、5000年の歴史が脳に覆いかぶさってくるような気持ちになる。

午後7時に北京を出発。約2時間後に雨の降りしきる南昌空港に着陸する。夜分遅くにもかかわらず、顔なじみの南昌市人民政府外事弁公室の張知明さん、同市教育委員会の喻水保副主任をはじめ、大勢の関係者の熱烈歓迎を受けた。

3 / 29 (水)

・南 昌

朝から一日中雨だった南昌市は緯度が奄美大島と同じで、北京より春の訪れが早く、柳の緑も鮮やかで紅のツツジが満開。まず、八一起義記念館を見学する。ここは1927年8月1日に武装蜂起した中国革命軍の指令跡地で、資料館として活用されている。中華人民共和国成立の前夜を思いうかべながら、展示された数々の貴重な資料に見入る。



劉副市長を囲んでの記念撮影

館長さんと親しく歓談した後、ホテルに向かい劉副市長をはじめ南昌市人民政府の皆さんを表敬訪問する。丁重な歓迎と激励のことばをいただき、こちらから高松市長のメッセージを伝達した。この後の歓迎昼食会では、短い時間であった

けれど、終始、和やかな雰囲気の中で交流を深めることができた。

午後から滕王閣を訪れる。最初に建てられたのは初唐であり、この時代を代表する詩人王勃の滕王閣序が楼内に掲げられている。最上階に登れば、長江の支流の贛江は雨混じりの濃い霧につつまれ、運行船がゆっくりと行き交い、航跡がゆるやかに川面に尾を引いていた。一幅の山水画を見るようであった。



英字ワープロ授業での交流（第22中学）

次に訪問した第二十二中学では、校門からの強烈的な歓迎に感激する。この学校は外国語教育が専門で、挨拶の交換の後に王校長の案内で英語教育の現場を見学する。生徒は私語もなく、授業態度は熱心そのものだった。講堂での生徒たちの交流会では、民族衣装を美しくまとった少女たちの歌と踊りと楽器の演奏の素晴らしいさに感嘆する。最後は両生徒の娃哈哈の大合唱で最高潮となった。

いよいよ今夜は生徒たちが最も期待しているホームステイである。次々に迎えに来たホストファミリーとともに生徒たちは元気にホテルから離れて行った。

3 / 30 (木)

・南 昌

午前第三中学を訪問する。ここでも校門から校舎内まで立ち並んだ教師、生徒の熱烈的な歓迎を受ける。曾校長から丁寧な歓迎のことばをいただく。大勢の生徒の中に、昨年8月に高松から来た富さんの顔があった。富さんのお母さんは教師で、今回のホームステイの受け入れの一人でもある。



いずれの訪問校でも生徒の演技力と表情のどこでも人気の高かったお手玉遊び（第3中学）豊かさには驚かされるが、日頃の練習の場が学校なのか家庭なのかを聞けなかったのは残念であった。

午後から第二中学を訪問。この学校も歴史のある指折りの名門校で、優秀な人材を広い分野に送り出している。校長の歓迎の挨拶の中でも、その何人かを披露し、第二中学の教育者としての誇りがうかがえた。ここでも高松に来た鐘さん、尚君、呂君、趙君と目が合い、寸暇を惜しんで旧交を温めた。4人とも既に進路を決めており、頼もしい限りである。どの学校でも母国の古典音楽を大切にしてい

いて、中国古来の楽器による大合奏と少数民族の民謡の演奏は美事であった。

3 / 31 (金)

・南昌

2日目のホームステイを終えた生徒が満足した面持ちでホストに連れ立ってホテルに帰って来る。全員が揃った後、八大山人記念館は明末から清初めにかけて活躍した書画の巨匠である八大山人が隠遁したところで、貴重な書画を堪能する。周囲はのどかな田園で、池で釣糸を垂れる人あり、アヒルの養殖場あり、ゆったりと荷車を引く水牛も見かけた。



心びったりで上手になった合奏

次に訪問した第一職業学校でも正門から熱烈歓迎を受ける。この学校は商業コンピュータ、貿易秘書、企業管理、服飾デザインなどが主な学科で、生徒が自らの作品を着飾ったファッションショーには驚かされた。周校長は「我が校は技術労働者養成が目標であり、日本の職業学校を見学し、経験を生かしたい」と強く語られた。校舎の正面に掲げられた「争創一流走向全国」のスローガンが今でも印象深い。

外事弁公室の李芸主任、教育委員会の喻水保副主任と別れを惜しみながら、午後4時40分に寝台列車は南昌市を後に上海へ向かった。車窓から眺める丘は赤色で、あくまでも長く続く。この赤土は建築材のレンガになるのだろうか。食堂車で全員揃って夕食をとる。

4 / 1 (土)

・上海

折江省に入り空が白んでくると、広大な菜の花畑と道路沿いの高いポプラ並木が車窓に飛び込んでくる。家屋は瓦屋根の2階建てが多くなり、朝日を受け壁の白さが眩しい。

上海は中国最大の都市ということで、夥しい人と車にまず驚かされる。最初に訪れた玉仏寺は上海では最も参詣者が多い禅寺。運よく法要の日で禅僧と参詣者のうやうやしい五



交流もほぼ終え、心なしかゆとりが? (豫園)
体投地を目の当たりにすることができた。ミャンマーから贈られた白玉製の横臥

仏は中国でも珍しいとのこと。咄嗟に法然寺の寝釈迦を思い浮かべる。豫園へ至る通りは観光客で溢れ、食堂、土産店が立ち並ぶ景観と賑わいは、大阪の道頓堀の町筋のようだ。豫園は租界時代も中国人だけの居住区とあって庭、池、桜は彼らの思い入れと技術が存分に込められている。

午後は外灘、黄浦公園をバスから眺めた後に南京路を散策する。外灘はアヘン戦争に破れた清朝が上海の土地をイギリスに貸与した時から開発した地区で、当時の建物がそのまま残っており、エキゾチシズムが漂うウオータフロントだ。中国一の繁華街である南京路は近代的な高層ビルが両サイドに立ち並び、行き交う人々の服装もハイカラで、東京の繁華街を歩いているのかとの錯覚に陥るほどである。

その後、尖塔とロシア風建築がトレードマークの上海工業展覽中心の工芸品販売コーナーで買い物。中国での最後の眠りに就く。

4 / 2 (日)

・上海－高松

訪問期間ずっと親身のお世話をいただいた曾さん、涂さんとなごりを惜しみながら空港で別れ、出国審査のあと搭乗。1時間余りの遅れで空港を離陸して、機内食や飲み物のサービスを受けている間に関西空港に到着。関西空港からは専用バスで伊丹空港へ向かう。兵庫県に入ると、去る1月17日の阪神・淡路大震災の悲惨な爪痕が現れる。YS機から美しく輝く市街地と船の灯を眺めながら、やっと高松空港に到着。大勢の出迎えを受け、簡単な報告の後に解散。生徒は8日間の訪中で会得した貴重な体験を明日から各自の日常生活の場できっと生かしてくれるに違いない。

所 感 集

財高松国際交流協会参事 岡田正昭



高松市国際交流協会が主催する第4回中学生訪中親善使節団派遣事業は3月26日（日）から4月2日（日）まで7泊8日の日程を無事に終了し、所期の目的を達成することができた。

出発に先立つ2日間の事前研修では、生徒たちの班別の自主的な協議、全員での歌の合同練習を通じ、班そして団全体の一体感が自然に醸成され、心強く思った。

特に、今回から初めて前年に引率された先生の経験談を加えていただいたことは、私たち引率者と生徒たちにとって貴重なアドバイスとなったので、是非とも続行を切望します。

北京空港到着から上海空港出発までは、旧知の曾さんと涂さんが献身的に案内をしていただき、また、訪問先のすべてにおいて熱烈歓迎を受けた。この歓迎ぶりは先輩から前もって聞かされていたが、現実に直面したその強烈さは想像をはるかに越えていた。訪問先で生徒が力強く振る小旗の波と朗らかな笑顔が今なお印象深い。

生徒の交流会はいつも中国側の出し物から始まった。改革・開放路線への変更で近代化に拍車がかかっている真っ直中で、生徒が中国古来の音楽や芸能を演じる技量と表情の豊かさに感嘆するとともに、このように伝統を大切に、見事な演技力を育てる教育方針は素晴らしいことだと思った。

続いて高松側の生徒の登場となる。初めは少し遠慮がちでぎこちなかったが、2回目からは明るく元気に振る舞えるようになった。若い世代ほど環境の変化に早く順応できるものだ。お手玉、紙ふうせん、折り紙は中国の生徒にとって珍しく感じたようだ。言葉はお互に通じなくても、身振りやしぐさだけでこれらの遊びを通じ、両生徒が入り交じって楽しく遊ぶ光景は誠にほほえましく、遊びを通じた交流の威力を改めて思い知らされた。

今回の訪問で最も効果があったのは、これまで1日であったホームスティが2日に増えたことにあると思う。その第1日目に生徒をホテルから見送した後、関係者の協力により引率の先生と2班に分かれホームスティ先である2家庭を訪問し、生徒と家族との交流の現場を直接に見る機会を得た。生徒は英語と漢字を駆使して何とか早く家族に打ち解けようとする積極的な努力が、また、家族も生徒を一員として温かく迎えようとするひたむきな気持ちが強く伝わってきた。

上海に向かう列車を待つ南昌駅では、受入れ先の家族が揃って土産を携え見送りに来た。再会を誓って別れるシーンは2日間のホームスティでの交流の成果を集約するドラマ的一幕と感じられた。この2日という数字は、これまでの単なる2倍でなく10倍もの重さに値するに違いない。

最後に、今回の訪中団派遣に協力をいただいた関係の方にお礼を申しあげ、報告の締め括りとします。



交流を誓って劉副市长との握手

高松市桜町中学校教諭 高橋 正 人



まずはじめに、中学生訪中親善使節団の引率者として中国を訪問する機会を与えてくださった高松市国際交流協会ならびに関係の皆様方に、また、訪問期間中献身的なお世話をいただいた南昌市人民政府の皆様、日中友好協会の皆様、私たち使節団を熱烈に歓迎してくださった皆様方に心より感謝申し上げます。

北京での印象は、やはり日本にはないスケールの大きさでしょうか。どこまでも続く万里の頂上の城壁、故宮の広さと立派な調度品の数々、天安門広場の石畳、製作の過程に思いを馳せたとき、どれくらいの人々の力と汗の結晶か、広大な土地・人民を掌握し権力を誇示するための象徴か、とにかく中国五千年の歴史の一端に触れる貴重な体験でした。北京の気候は早春、樹々の芽吹きはまだ浅く、山から吹きおろす風は冷たく、唇がカサカサになるほど乾燥していました。

空路南昌へ移動。日本の梅雨を思わせる細かい雨が降っていました。樹々の緑は鮮やかで、北京との風景の差に驚き、中国の国土の広さを感じました。

南昌第二、第三中学校などの訪問校では、文字どおりの熱烈歓迎を受けました。交流会では、何日も前から我々のために準備・練習をしてきたと思われる歌や踊り、楽器演奏どれもすばらしい演技・演奏で、歓迎の大きさが心に染み渡りました。笛、踊り、歌等バラエティに富んだ出し物で、文化的な伝統の深さや個性重視の中国の教育をうかがうことができました。

心配していた高松の中学生のアトラクションも本番では、一生懸命さが伝わったのか拍手喝采の好演でした。言葉の通じない不安を抱きながらホームステイを2日間も経験した中学生達は、身ぶり手振りを交え片言の英語、中国語を駆使し、初対面の接待役の中国の中学生と楽しく交流できるようになっていました。その姿を見てひ弱そうに見えた中学生の数日間でのたくましい成長ぶりに驚くと共に、国際交流の主演はこの若者達であると確信しました。

今回の旅行の楽しみの一つが、南昌～上海までの列車の移動でした。午後2時に出発し翌日の午前7時に到着する17時間の旅です。我々の車両は4人部屋で、左右に2つずつの大きめのベットが作られていました。窓から見える景色は、一面の菜の花畑あり、小さめの田圃を農夫が牛で耕す風景が見えたり、のどかな田園地帯が広がっていました。1枚1枚の田圃が想像より小さかったのは、人の力で耕作するため大きくできないのでしょうか。何軒かの家が塙に囲まれて一つの村を作りその回りに田圃が広がっていました。村人総出で、煉瓦を積み重ねて家を作っている風景も見られました。上海に近くなると家が白っぽく見えました。家の作り方、煉瓦の色に少しずつ違いがあるのでしょうか。あまり車の走っていない立派な道路も見えました。今後の経済の発展で、大動脈になる道なのでしょう。

この度の訪中は、中国の文化や生活習慣に直接触れる貴重なものになりました。わずかの期間で、全てが分かったわけではありませんが、見聞を広め、中国の人の心の暖かさに触れ、日本での生活ぶりを再考させてくれる機会を与えてくれました。桜町中学校は、国際理解教育の推進校に指定され学校教育の中で、どのように国際人としての資質を磨いて行くかを研究しています。この体験が、研究推進に役立てられたらと考えています。





思いもよらぬ中学校訪中親善使節団の引率という大役を任せられ、出発前は不安で一杯であった。しかし、どの生徒も指導をよく聞き、節度ある行動がとれ、全員無事7泊8日の旅を終えることができほっとしている。

3月26日大変慌ただしい中、日本を出発し中国（北京）に入る。北京で最初に目にとびこんだものは、ものすごい数の自転車と人々の群れであった。見学地の、明の十三陵・故宮・天安門広場・万里の長城をまわる。とにかくどれもスケールが違う。とてつもなく大きい、私が想像していた以上に。特に万里の長城の上から眺めた雄大な景色は、大変すばらしく、私の心の中にくっきりと刻み込まれており、今もなおまぶたを閉じると鮮明によみがえる。

3日目の夜、北京から南昌へ入り、4日目の朝、南昌市人民政府表敬訪問、次に第二十二中学・第二・第三中学・第一職業学校へ交流会に向かう。表敬訪問を初め各学校では、拍手の嵐の中「熱烈歓迎」を受けた。それは本当に心温まるもてなしで私自身、鳥肌が立つほどの感動と興奮を覚えた。

第二十二中学では授業風景を見ることができた。どの生徒もよく集中し意欲が感じられ、目の輝きが日本の生徒とは一味違うと思った。交流会においても積極的に歌や踊りを披露してくれ、すばらしい表現力で我々を魅了した。もちろん使節団の生徒も数少ない練習にもかかわらず、大舞台ですばらしい発表を見せた。

いよいよ夜になり、今回の最大の行事でもある2泊ホームステイに向かう。最初は期待に胸を膨らませていた子供たちではあったが、いざとなると不安に満ちた表情がみられ、戸惑いが感じられた。初めはどうなるかと心配ではあったが、二日間身振り手振り、簡単な中国語で、みごと中国の子供たちと交流を深め、友情の輪を広げたのである。もちろんホームステイ先では大変温かいもてなしと、真心込めた接待がなされており、通訳までも雇ってくれていた家庭もあったようである。おかげで生徒たちはみんな満足きった顔をして、「先生むちゃくちゃ親切にしてくれたわ」「中国の人はやさしいの」「もう1回行きたいわ」などと感想を話してくれた。できるものなら私も……と子供たちの話を聞きながらうらめしく思うしだいであった。

6日目の夜、南昌を立つ。この夜は列車の旅であった。明け方どこまでも広がる田園風景を窓越しにみながら上海へと向かった。上海では市内観光をし、上海動物園で珍獣パンダを見学した。そして2月2日、日本へ帰国した。

21世紀をになう若者にとって世界の大国であり、日本の歴史・文化の根源でもある中国を實際目で見、肌で感じた今回の体験は、今後の大きな財産となるであろう。この体験をぜひ学校でも広め国際交流の資料として役立ててもらいたい。

最後になりましたが、訪中期間中お世話いただいた曾建民さんをはじめ南昌市人民政府の皆様方、各学校諸先生方に深く感謝したいと思います。ありがとうございます。





外国を訪問するのが初めての私にとっては、出発に際して期待と不安が大きいものでありました。女子生徒達は、高松空港からすぐに交流ができ、関西空港では男子生徒も親しく交流ができました。私も生徒達の笑顔に緊張も柔らぎ、団員一同和やかな雰囲気の中で中国に出発しました。

初日は史上最大の建造物である「万里の長城」の見学でした。周の時代に北方騎馬民族の侵入を防ぐために築いた城壁が長城の始まりです。その後、秦の始皇帝が30万の軍兵と数百万の農民を動員して完成させたのです。緩やかな傾斜「女坂」と急勾配の「男坂」と呼ばれている2つの坂がありました。私は男坂を登るだけで精一杯でしたが、2つの坂を両方とも登って自然の雄大さを満喫した生徒もいました。

2日目、世界に知られる中華人民共和国のシンボル天安門、明・清時代の栄華盛衰を物語るかつての紫禁城故宮、ほか市内の見学をして、南昌に向かいました。

南昌では、夜遅く着いたにもかかわらず、張知明さんをはじめ南昌第二十二中学校の皆様のご温かい歓迎を受けました。

翌日勉強の様子を見せていただき、どの生徒の顔も学習に対して、学ぼうとする一生懸命な姿勢に、生徒達も私自身も学ぶべきことが多くありました。交流の場では、堂々と自信にあふれた態度の演技を見せていただきました。団員の中には、その日がちょうど誕生日のために、ケーキやプレゼント等のお祝いをしていただくという思いもかけない場面があり、一層親しみを感じました。団員もそれに応えようとする姿が見られ、まさに心と心の交流ができたと思います。

ホームステイでは、受け入れる中国の方の希望が多いため、昨年と違って今年は2日間でした。一人で訪問するのに不安がる生徒もおりましたが、私達引率者も市や学校の方々のお計らいで、何軒かのホームステイを訪問することができました。家族の方々やたくさんの友達に熱烈歓迎を受けて、この上ない感激にひたっていたので、安心しました。2日間過ごした後は、どの生徒も一杯のおみやげを手に心温まるもてなしにおお満足していたようです。

そして、ホームステイの人達に見送られて寝台特急で上海へ。4人一部屋で車中泊、長い列車の旅を大いに楽しんだことでしょう。

言葉も習慣も違う中国で出会った人々の温かいぬくもりや、多くの人の友情の輪が広がったこの8日間で学んだ貴重な体験を生かして、大きく成長してほしいと思います。

最後に、中国を訪問する貴重な機会を与えてくださった高松市国際交流協会ならびに関係者の皆様方、また、訪中期間中笑顔で終始献身的にお世話してくださった曾さん、徐さん、中国でお世話になった皆様に深く感謝申し上げます。

ありがとうございました。





中国での8日間の旅。多くの刺激を受け、自分の中国に対する考え方が180度変わった旅だった。そして、一番の収穫は沢山の友達ができたということだ。

北京での2日間は、万里の長城を始めとする中国の広大な自然に触れ感動の連続だった。また、それぞれの観光地に行くまでのバスからの眺めはとても興味深いものだった。右側通行の広い道には、車といっしょに馬車が通っていた。テレビでよく見る中国おきまりの自転車ラッシュもあった。正月でもないのにたこあげをしている人、道ばたで散髪をしている人などを見て、生活様式の違いを感じた。特に印象に残ったのは『ニイハオトイレ』だ。「旅の恥はかき捨てろ」ということでみんなで入った。

さて、南昌での3日間だが、4つの中学校の生徒さんとの交流は、とても楽しかった。

「コミュニケーションはまずあいさつから。」と思って『你好』『你好嗎?』『謝々』『哪里哪里』『再見』を覚えていった私は、この5つの中国語と中学校2年間で積み上げてきた(?)英語を使って会話をした。そして、漢字と絵がこの情けない語学力を手助けしてくれた。

各学校では、工夫を凝らした歓迎をしてくれた。バスを下りると花を持った大勢の生徒さんが手を振って出迎えてくれた。学校の集会室では、生徒さんが踊りや歌、その地域独特の楽器を使っての演奏をしてくれた。このような出し物を見ている時も、近くにいた中国の生徒さんと会話をした。言っていることがちんぷんかんぷんでさっぱり意味がわからないこともあったけど、会話が通じた時はとてもうれしかった。やっとなじめて、住所を教え合い友達になれたと思うとすぐにお別れで寂しい思いを沢山した。けれども、文通を続けて、友達の仲をずっと保ちたいと思う。

今回、一番楽しみで一番不安だったホームスティ。2人ずつの予定が急に1人でホームスティをすることになり、不安は倍増した。

私のホームスティ先は肖さん一家で、両親と女の子2人の4人家族だった。握手から始まった一家との交流は、私の不安を一遍にかき消してくれた。私より2歳年上の『芳々』は、英語がペラペラだった。将来は、英語の先生になりたいと夢を語ってくれた。こうした会話も、もちろん英語を使った。しかし、私の勉強不足のため、ほとんど辞書に頼ってしまった。英語を真面目に勉強していれば、と後悔した。が、こんな私の会話表現でも気持ちは十分通じたと思う。お母さんは言葉は通じなかったけれど人間味あふれる人だなと思った。お母さんが作ってくれた夜食のワンタンが恋しい。

ホームスティ2日目には芳々の友達がたくさん来て、私は日本語講座を開いた。得意気に話す私を見て、妹の芸々はただただ笑っていた。その笑顔が忘れられない。お父さんは私の父に、お酒をプレゼントしてくれた。肖さん一家といつの日かまた会えることを願っている。

今回の旅で、私の夢である「世界中に友達をつくる。」に一步近づいたような気がする。

このような素晴らしい機会を与えてくださった皆様、団長先生を始め、先生方、そして16名の仲間達、本当にありがとうございました。-謝々-



ホームスティ先で



八日間の中国での日々。帰国してからも、片時も忘れることのない思い出。一冊の本が書けるくらい、あるいは、何から書き始めれば良いか分からないほど、いろいろ経験した。

行くまでずっと心配していた。友達はあるだろうか？言葉は通じるだろうか？食事は？トイレは？飛行機、落ちたらどうしよう？だが、そんな不安とは裏腹に、新しい発見と喜びに満ちた一週間がスタートした。

一日目。生まれて初めての飛行機、もちろん初めての海外。何から何まで珍しく、興奮し、また夢のようだった。

二日目以降、一日目はまだまだ序の口だったことを痛感させられた。北京の街は自転車の波。すごい荷台の三輪車のおじさん、荷馬車、露店。活気に満ちた街の光景は、決して見飽きることがなかった。また、万里の長城、故宮をはじめ、どれもが想像よりずっと大きかった。中国ははすごい、心からそう思った。

北京を去る時は、小学校の修学旅行の終わりの気分に似ていた。あまりに速い時の流れを切なく思う。実は、そこからがもう一つの、本当の冒険だったのだけど。

南昌では何もかもが楽しかったが、特に心に残っているのが学校訪問とホームステイだ。どの学校でも想像をはるかに超えた熱烈歓迎を受け、感激してしまった。すごい英語で話しかけられ、あせったりもした。たくさん友達ができ、手紙を書くことを約束した。みんな積極的に親切で、いい人ばかりだった。

ホームステイでは、郭琮さんの家でお世話になった。裕福そうな家だった。漢字で書いたり、片言の英語でつまりながら話したが、不思議と通じた。

南昌の買い物は大変だった。英語すら通じない所もある。ジェスチャーと知っている限りの僅かな中国語で、分かってもらえた時は本当に嬉しかった。「謝々」。下手な中国語でそう言った時の、店のおばあさんの笑顔が忘れられない。使い古したしわくちャの人民幣を見る度に、あのおばあさんの、というか、中国の人々の温かい笑顔を思い出す。

上海は都会だった。デパートは日本人向けに、何でもべらぼうに高い。北京や南昌の、どことなく漂うのどかさが懐しかった。

八日間で、噂の你好トイレも数回経験した。「こっち見んとってよ、！」と叫びながら。また今まで食べたことのないような辛い料理もたくさん食べた。初めて蛙も食べた（很好吃）。だが、やっとな異文化に慣れてきたと思う頃には、もう時間は残されていないなかった…。

帰りたくなかった。一ヶ月くらいいたかった。生の中国に触れ、この国にすっかり魅せられてしまっていた。南昌を立つ時も、中国を去る時も悲しかった、涙がこぼれそうなほど。そして誓った、「絶対戻って来るゾ」と。帰国後、テレビの「中国語会話」を始めた。

最後に、国際交流協会の方々、引率の先生、曾さんをはじめ中国の方々、そして、十六人の仲間。皆に心から「謝々」を言いたい。



ホームステイ先で



この八日間で「私」は変わったと思います。

今回、一番良かったのは二泊のホームステイです。私は、一つ年上の黄磊さんの家に滞在しました。最初は、不安と緊張とで一言もしゃべれませんでした。黄磊さんの家につくと、家族や親戚の方々が熱烈歓迎してくださいました。細かい気配りがとてもうれしく、その一つ一つが私の心にしっかりと刻み込まれています。一日目は、主にお互いの紹介や、私が日本のことについて教えてあげたりしました。二日目は、南昌市の放送局の方が黄磊さんの家に取材に来ました。私も、「中国の人はどんな印象ですか。」と質問されました。もちろん、「みんな親切で、優しく、大好きです。」と答えましたが。それから寝る前に中国の楽器（琵琶の一種。）を教えてくださいました。黄磊さんは五年間習っていたのですが、とても上手でした。そして、『幸せなら手をたたこう』を演奏してくれました。演奏しながら日本語で歌ってくれた時は本当にうれしかったです。私も挑戦してみましたが、ドレミを5分かけて弾くのが精一杯で、黄磊さんはすごいな、と思いました。

それに、私のあいまいな英語もちゃんと理解してくれました。それなのに私は勉強不足で辞書を片手に会話をしていました。いくら光洋中学校で英語の成績が良くても、教科書を丸暗記しても、ちょっと視野を広げると、ぜんぜん通用しないと思いました。

家を出る時には、両手にいっぱいのおみやげと、あふれんばかりの笑顔とで送り出してくれました。たったの二日でしたが、その二日は本当に、最高の二日間でした。

もう一つ良かったのは万里の長城です。私は山地さんと一緒に登りました。その日はとても天気良くて、どこまでも続く万里の長城をしっかりと見ることができました。下から見上げた時も立派だったけれど、上から見渡す景色は言葉では言い表せないほどすばらしかったです。けど、それ以上に万里の長城を築いた人がいるということはすごいことだな、と思いました。

この8日間を通して、私は今まで何てちっぽけな範囲で生活を営んで来たのだらうと思いました。国土も歴史も人の心も全てが広い中国で学んだことは、はかり知れません。今までの私の生活の中で一番の思い出です。

そして、16人の仲間と出会えて、一緒に8日間を過ごせた事が私にとっては何よりの収穫です。

最後に、今回このようなすばらしい機会を与えてくださった先生方、国際交流協会の皆様に心から感謝したいです。

本当にありがとうございました。謝謝。



黄磊さんと…

高松市立城内中学校 福田 浩 利



日本の約25倍の国土を持ち、その人口は12億ともいわれる広大な中国。思いがけなく第4回中学生訪中親善使節団の一員として、僕はこの国を知るチャンスを与えられました。

中国と日本は日本海をはさんでのお隣り同士です。古くから、両国に交流があったことは前漢の歴史を書いた「漢書」の地理志に「倭人」が登場しますし、「後漢書」の東夷伝や魏志倭人伝にも述べられています。しかし、残念なことに、長い歴史の間には必ずしも友好の時代ばかりでなかったこともありました。しかし過去の歴史はともかくとして、同じ時代を生きる中学生として、中国の学生と会えることを、とても楽しみにしていました。

まず北京では、道路をときどき馬やトラクター、オート三輪が走っていて、同じ道路に速度の違いのいろいろな種類の乗物が走っているのを見て、事故がおこらないか心配してしまいました。しかし、中国の人は日本人よりゆったりと道を歩いていたことが印象的でした。



ホームステイ先では、僕のためにテレビゲームを用意してくれていて会話で少しとまどっていた僕達は、たちまちうちとけて楽しい時を過ごすことができました。御家族の方々がとても優しく気を遣って下さっていたことに対して、こちらでは「謝々」とか「Thank you.」としか言えなかったことがとても残念で、もっと英会話を勉強しなければと思いました。

この旅で得た、中国の友と高松の友をこれからも大切にしてゆきたいと思いました。僕にとって初めての海外が、民間外交として日中友好の旅となり、おまけに14回目の誕生日を南昌市で迎えたこと等、本当に素晴らしい思い出となりました。団長さんはじめ引率の先生方、交流協会の方々、本当にありがとうございました。

僕にとってこの訪中親善使節団が初めての海外となったのでとても思い出に残る旅になったと思います。初めての飛行機、初めての異国の大地どれも新鮮でした。

飛行機をおりともう周りは真っ暗だったので見えるものといえば道路の両側に植えられている並木ぐらいでした。しかし朝起きてホテルのカーテンを開けると朝日とともに中国という雄大な大地が僕の目にとびこんできました。それはとても新鮮ですがすがしい気分にさせてくれました。

北京での見学で心に残っているのは万里の長城と天安門広場です。万里の長城はとてつもなく長くまた天安門広場も広場とは思えないくらい広がっています。

中国の建築物の美しさや大きさにも驚きましたが中国の中学校に行ったときの歓迎には圧倒されました。

南昌市では主に中学校との交流がたくさんありました。どこの中学校にいても「熱烈歓迎」でしかも中国の伝統的な踊りや歌も見せてくれたり聞かせてくれたりしました。

今回の旅のメインとなるホームスティには一人で行くということを聞かされたときは緊張しましたが、いざ会ってみるととても親切にされていくらか緊張もほぐれました。

僕をむかえてくれた欧君一家は緊張していた僕を笑顔でむかえてくれました。僕はそれでとても安心しました。

欧君の家ではたいへんな感激をうけました。欧君の家に着いてからは片言の英語とジャスチャーでなんとか通じましたが僕のいった言葉が分からなかったり質問されて僕が答えられなかった時にはゆっくり話してくれたり、違った言い方できいてきたりしてくれました。とにかくホームスティさきではとても親切にされました。荷物を持ってくれたり、シャワーの使い方をこまかく教えてくれたり、ドライヤーを貸してくれたりとほんとうにいろんな面でよくしてくれ生活には全々こまりませんでした。2泊という短い間しかいらなかったことが少し心残りです。しかし、またこの雄大で美しい中国にこれのようなことがあれば必ず訪れたいです。日本に帰っても手紙を書いたり電話をかけたりして国境を越えた友情を大切にしていつまでもこの関係を続けてゆきたいです。このホームスティで中国人の日本人と違ったやさしさを感じ中国に来てよかったなあと感じました。

七泊八日という短い間でしたが中国の雄大さと、そこに住む人々の温かい心にふれられることができ心に残る旅になりました。

このような素晴らしい機会を与えて下さった市長さんをはじめとする関係者の皆様、先生方、団員のみなさん本当にありがとうございました。この素晴らしい思い出は一生忘れません。



万里の長城にて

高松市立屋島中学校 中 村 真 依



第1、第2の研修を終えてもまだ実感がわかない私は、3月26日の朝、期待と不安の中、高松空港に足を踏み入れました。

私の課題は、「沢山の人と交流し、世界との輪を広げよう」「日本とは違う世界を見て心を大きくし、考え方を広げよう」この2つでした。

北京では主に観光です。万里の長城、天安門広場、故宮等のテレビを通してしか知らなかったすばらしい物が次々と眼に飛び込んできました。もう、「ウァー、すごーい。」単純ですがこの言葉しか出て来ない物ばかりでした。なぜこの言葉なのか、分かると思いますが、理由は2つです。大きさと色彩。中国の特徴ですね。この大きさはあの広大な中国だからこそ可能な事。日本では、想像を絶する大きさです。あの大きさはテレビではダメ。実際に見て来た者だけが味わえる感動なのだ、その時ははっきりと実感しました。あのような国で生活したらどんな人になるのでしょうか。心の大きな人になる事間違いないと思います。沢山の偉大な人をうんだ中国の秘訣の1つとして考えられる事ではないでしょうか。次に色彩。青・緑・黄・赤と全て原色です。はっきりした物ばかりで、眼がチカチカしてしまう程です。日本は黒や赤でシックにきめている部分ってけっこう多いですが、中国では正反対です。同じような顔つきをしている中国とは文化や生活習慣が似ていると言われますが、やはり、それぞれで築き上げてきた文化には違いも沢山ありました。

次は南昌です。ここでは4つの学校を訪問しました。その度に赤面してしまう程の『熱烈歓迎』でした。何も分からない私に嫌な顔ひとつせず、1つ1つ丁寧に教えてくれました。ここでの思い出の1番はやはり2日間のホームステイです。中国の方のすばらしい英語力に全くついていく事のできない私でしたが、私なりに紙とペンとジェスチャーで一生懸命がんばりました。カタコトの英語が通じた時の感動は忘れられません。2日間緊張していてもとても疲れたので、すばらしいベッドではぐっすり眠る事ができました。そして2日目の朝「I hope you look this as Chinese home」と言われました。なかなか理解できなかったけど、分かった時「あー、ずっとここに居たい。」そう心から思いました。がんばって英語で文通したいと思います。

全てが日本とは違いました。バスの中で疲れて眠ってしまう事がもったいなかった位です。それは、全てを眼の中に収めておきたかったからです。初めての海外旅行において、何事にもチャレンジ精神を旺盛にする事が、おのずとすばらしい結果へ導いてくれるのだと改めて実感しています。最初に掲げた課題も充分達成できたと思います。

これから以後高松市と南昌市、あるいは日本と中国がもっともっと理解を深め、最高の友好関係を結んで欲しいと思います。謝謝。



南昌市第二中学校の友達と一緒に



3月26日、家族の見送りを後にして僕は、中国への第一歩を踏み出しました。飛行機を乗り継ぎ、上海で入国審査をしました。手続きは思ったより簡単にスムーズに(?)済みました。北京に着いたのはもう夜でした。ホテルに着き部屋に入るといきなり困りました。なんと電気がつかないのです(正確に言うとなつけ方がわからなかったのだが)。その他風呂が日本と少し違い戸惑いました。その日は慣れない飛行機での移動の疲れで、ぐっすり眠ることができました。

27日、窓からは朝日差し込むすがすがしい日でした。しかし、僕は初日から寝相の悪さを発揮し、枕元に置いてあった目覚し時計は床に転がり、枕までもがどこかへすっとんでいました。そんなことはさておき、観光地のメインといえる万里の長城へ行きました。想像を絶する大きさでした。「よく造ったものだなあ。」と感心しました。

28日、中日友好協会表敬訪問では、あいさつをしました。下手だったにもかかわらず「立派なあいさつだった。と協会の方がほめてくださりとてもうれしかったです。その後、天安門広場や故宮を訪れそのスケールの大きさに驚かされました。その日の夜、親善交流の本場、南昌へ着きました。

29日、学校訪問をし、熱烈歓迎を受けました。そして交流のメインであるホームステイをする時がとうとうやってきました。期待20%不安80%の気持ちでホテルから出ていきました。二人の人が僕のネームを見てから何か言いました。不安そうな顔の僕に笑顔を見せて、車まで手を引いて案内してくれました。車の中で英語で何か話しかけてくれました。しかし、緊張していたのであまり返事ができませんでした。家に着くと早速家族紹介をしてくれました。だいぶリラックスしてきたので、へたではあるが英語で会話をしてみました「OK」と言ってくれるので「なんとか通じているなあ。」と安心しました。

ホームステイ二日目、ともなればもうなれたもの。李君とは肩を組んで歩くほど仲良くなりました。その夜、友達が六人も来て歓迎してくれました。その内お母さんが「餃子を作ってみませんか?」と勧められたので、作ってみました。初めの内はうまくできなかったけれど作っている内に上手になり、「Very good!」とほめられました。

31日、「必ず手紙を書くから。」と言って別れました。現に今、二通のエアメールが手元にあります。それを読んであの時を懐かしんでいます。

4月1日、上海の町を歩き、お土産を沢山買いました。

4月2日、とうとう最終日となりました。朝、動物園でパンダを見てすぐに飛行機に乗り、中国とお別れでした。「まだ帰りたくないのにな…」という気持ちで一杯でした。

こうして長いようで短かった7泊8日の旅は無事終了しました。この体験を通して今までとは違う新しい『中国』を知ることができました。使節団として中国に行ったことを誇りに思っています。

最後になりましたが、岡田団長先生を始め引率の先生方どうもお世話になりました。そして16名の仲間達、どうもありがとう。謝謝。



予想をはるかに超えた万里の長城



三月二十六日、私は中国へと旅立ちました。出発の日まで私は期待と不安で胸がいっぱいでした。あの親善訪問から帰ってきて何週間もたちますが、私はあの八日間の出来事がまるできのうのこのように思います。

北京に着いた時、私は中国という広大な国を目の前にして、信じられない気持ちでいっぱいでした。翌日は北京での見学でした。いろいろと見学した中でも一番私の心の中に残っているのは万里の長城です。社会の教科書などでしか見ることができなかったのも、実際に自分の目で見て、自分の足で歩いて確かめることができた喜びはとても大きなものだったと思います。

そして三日目の夜、私は北京を離れ南昌へと向かいました。南昌へ着いた時あいにく雨が降っていたのですが、「熱烈歓迎」で私達を迎えてくれました。南昌での思い出はなんといってもホームステイです。ホームステイ先の富雁さんのお宅では、本当に快く私達を迎えてくれました。初めは緊張して何をしゃべればいいのか分からなかったのですが、そのうちカタコトの英語で話すことができるようになりました。それにしても、英語がペラペラに話せることにはとても驚きました。私は絶対どこかで役に立つと思って、スーツケースの中に入れていた和英辞典が、ホームステイ中の二日間、片時もはなせませんでした。でも、筆談と身ぶり手ぶりの動作をしながら、お互いの学校のことを話した時間は、とても楽しい時間でした。富雁さんをはじめ富雁さんの御家族、お友達のみなさんありがとうございました。

南昌市滞在中に私は初めて経験したことが二つあります。一つ目は、ニイハオトイレに入ったことです。このトイレは戸がなく、おまけに隣とのしきりも低いため、ほとんど丸見えの状態なのです。二つ目は、カエルを食べたことです。数多くの料理の中で出されたのですが、妙においしかったのを覚えています。また南昌市では友達がたくさんできました。お互いの住所を交換し、手紙を送ることを約束して、また再会できることを願って別れました。

七日目と八日目は上海での見学でした。上海では、上海動物園に行ってパンダに会いました。この上海でもいい思い出はたくさんできました。

八日間という長いようで短い中国訪問でしたが、私にとって大変意味深いものだったと思います。岡田団長先生をはじめとする引率の先生方、そして十六名の仲間めぐり逢えて本当によかったと思います。まだまだ書きたいことはたくさんありますが、今回はこの辺でやめようと思います。最後に、このようなすばらしい機会を与えてくださった国際交流協会の方々、諸先生方、本当にどうもありがとうございました。このすばらしい思い出は一生忘れません。



南昌第三中学校で友達と



三月二十六日、私たちは中国へ旅立ちました。

私は、言葉・食事・交通・トイレなど全ての生活の面でとても不安を抱いていました。初めのうちは、「もう帰りたい！」と何度か思いましたが、十六人の仲間たちと一緒にいると、不安もだんだん消えてゆきました。

中国では、広大な万里の長城・天安門広場・故宮・各学校からの熱烈歓迎、そして人の多さなど、驚いてばかりでしたが、一番驚いたのは、中国の交通事情でした。道はガタガタ、自動車も自転車も馬車も関係なく走っているし、車のクラクションは年中鳴り響いているって感じてました……。しかし、事故はめったにないそうです。

三月二十九日、一番楽しみにしていたホームステイ。そこでもまた不安を抱きました。二、三人ずつのホームステイと聞いていたのに、一人ずつだったからです。私は、温雅さんの家にお世話になりました。温雅さんの家に入れば、もう日本語は通じないのです。中国の中学生は英語がよく出来るとは聞いていましたが、“よくできる”のレベルじゃありませんでした。私も少しはできるかなと思っていましたが、自分のレベルの低さにガックリしました。一番大変だったのは、やはり英会話でした。

ホームステイ一日目、家には一才年上の温雅さんと、私と同じ年の友達が二人居ました。会話の途中、知らない単語が並んで困ったことが何度もありました。まだ英語に慣れていなかったのです。でも二日目には、南昌市第二中学・第三中学との交流がありましたので、少し英会話にも慣れてきました。それでも困った時はスペルを書いたり、お互いに辞書を使ったりして会話も弾んできて、とても楽しいひとときを過ごしました。また、中国の人はとても親切で、お母さんが夜食をどんどん出してくれたり、お風呂に入れば背中を流しにきてくれたり…。

お母さんは英会話ができないので通訳は温雅さんが「My mother said……」や、「My mother asked……」と言って何とか会話はできました。そして、私が「謝謝」と言うと、みんなうれしそうに少し照れ笑いをしていました。

三月三十一日、ホームステイも無事終わり、その夜は車中泊で、乗り物酔いをしやすい私も十六人の仲間たちのおかげで、とても楽しく過ごせました。

上海動物園で可愛いパンダも見終え、長いようで短かった八日間の旅が終わりました。私は、十六名の仲間たちと引率して下さった四名の先生方、そして中国の方々に出会えたことをうれしく、また誇りに思います。

最後に、お世話になった方々、本当にありがとうございました。謝謝

そして再見！



ホームステイ先にて温雅さんと



まさか自分が中国に行くなんて、いつ想像したんだろうか。中国がどんな国か、なんてほとんどわからなかった。ただ漠然としたイメージがあるだけで、近いながらも身近に感じていなかった。が、今回の訪中で、そんな考えはもちろん変わり、多くのことを学んだ。

初めて踏んだ異国の土、北京。都市なんてそれは大まちがいだ。やはり長い間の、人々の生活習慣やら何やらのにおいがする。自転車が多い、人も多い。バスの中で活気あふれる町並みに魅入っていた。

また、北京では万里の長城や故宮などを見学（歩きまわったから歩学かも…）したが、もうとてもすごい！スケールが違う。国土に比例しているのか、歴史に比例しているのか、圧倒させられてしまいました。直に見れて感激！

その荘厳で美しい中になると、ふと『昔ここに立っていた人は何を思っていたのかなあ。』などと思われてくる。その時感じた宇宙のようにとほうもない思いの正体は、きっと歴史の深さなのだろう。

さて、北京を立ち次は友好都市南昌へ。どこへ行ってもすごい歓迎で、嬉しさとともに自分に課せられた任務を改めて認識した。交流会での私達の発表は、少々おそまつだったろうが、一生懸命頑張ることができたので、心だけでも伝わっていると嬉しい。まだ、自分なりにいろんな人に話しかけることができ、消極的な私にとっては進歩だ。

いよいよホームステイ。とても不安だったが、そんな私を、ステイ先の人にはあたたかく、優しく迎えてくれた。言葉が通じず困ることもしばしばあったが、最後にはどうにかなるものだ。私の無茶な英語も、頑張って理解してくれた。本当に楽しく貴重なひとときをおくることができ、美江さん一家には、感謝してもしつづせない。

名残を惜しみながら、最後は上海へ。中国はどこも人が多いと思ったけれど、上海はその中で一番だ。日本なら、お祭りでもあんなにいないだろう。その他、寺など私達にもなじみのある所や、動物園を訪れた。上海動物園のパンダは超かわいらしかった。

そんなこんなで八日間はあっという間に過ぎ去った。とても充実した、意義の深い八日間だった。中国という国のことなら、教科書にも載っているし、知識だけならいくらでもつけることができる。でも、それらには決して載っていない、実際に見なければわからないものを、私は知ることができたのだと思う。

近ごろは、国際化社会だの情報化社会だのいわれているが、まだまだ私達は、中国も含め、世界の国々のことを多く知らない。これからは、例えば子供でも積極的に交流し、お互いを偏見抜きで理解していくことが必要だろう。この訪中はその一歩でもある。そうしていけば、いつか“世界は一つ”になる日が来るのではないだろうか。



ホームステイ先にて

中国—それは初めて踏んだ海外の地。8日間の思い出がぎっしりつまつた国。そして友達と時を過ごした国。



中国へ行って私が得た宝物—それは中国の友達。高松市内の友達。

中国の友達はとても英語が上手だった。片言の英語しか話せない私。この時ほど自分の英語の実力を思い知らされたことはなかった。「またいつか中国の友達の所へ行くために、もっと英語が話せるように努力しよう。」と何度思ったことか……。

高松市内の友達とこんなに仲良くなれるなんて思っていなかった。研修のときはみんなおとなしかった。もちろん私もおとなしかったが……みんなで過ごしたこの8日間。このすばらしい思い出をいつまでもポケットから取り出せるようにしておきたい。

中国へ行き、感動したこと。それはたくさんあるが、とくに心に残ったことと言えば、3つある。

1つめ。広大で自然が多かったこと。万里の長城や故宮などを見ていると、

「やっぱり日本は小さい国なんだなぁ。中国は広い。」

などと感心してしまう。とにかくスケールの大きさがちがう。

2つめ。中国料理。特にかえるが食べられたこと。かえるのからあげは、思っていたよりすごくおいしかった。しかし、皮の模様がくっきりと見え、これが足だ、などど分かってしまい、あまり食べられなかった。他にペキンダックなど、日本ではあまり食べられないようなものがたくさん食べられた。

3つめ。ニーハオトイレ。初めはものすごくとまどった。しかし、何回もニーハオトイレと出会ってくると、感動が変わった。写真をとっている友達も何人かいたし、歌まで作って歌っている友達もいた。ニーハオトイレは中国人にとっては常識のことだ。常識というのは、すごいものだと思うた。

中国に行き、日本だけにとどまっているのではなく、広い視野で世界を見ることが必要だと思った。これからは、日本中心の狭いものの考え方から、世界規模の広い範囲の考え方が持てるようにしたい。

中国で育てた心とともに……

最後に第4回訪中使節団へ参加したみんなへ。この8日間とっても楽しかった。ありがとう。またみんなで遊ぼうね。





僕は中華人民共和国に訪問して本当に良かったと思っています。その理由の一つは沢山の友達ができただけのことです。一緒に行った他の学校の人は勿論、向こうの人とも仲良くなることができ、文字通り国境を越えた友達ができただけのことです。一緒に行った他の学校の人は勿論、向こうの人とも仲良くなることができ、文字通り国境を越えた友達ができただけのは何よりうれしいことです。

もう一つの理由に中華人民共和国の事について色々知れたことがあります。例えば広大な土地です。今までも中華人民共和国が大きい国で歴史も深いということは知っていました。しかしこの訪問によってそのことを肌でひしひしと感じました。故宮や万里の長城、どれを見ても日本とはスケールが違います。またそのような建物から皇帝の権力の凄さを感じました。特に故宮といえば大きくまた鮮やかなデザインをした建物が百以上も並んでいるのです。今まで日本にも全国支配をなした者がいました。しかしあれ程のものを見たことはなかなかありません。確かに東大寺や日本の城を見た時は感心しました。しかし故宮を見た後では色褪せて見えました。本当に中華人民共和国の過去の皇帝の権力の強さに圧倒されました。

また中華人民共和国といえば今世界で一番すごい勢いで成長しているといっても過言ではない経済です。僕は中華人民共和国に行くまで、日本田舎と言われるような所しかないと思っていました。しかし行ってみれば土地が広いだけにそういう所もあったが、町中に入っていくにつれて大きなビルが並ぶようになっていました。向こうの人に聞くと近頃数年かで計画的につくられたといわれてすごくおどろきました。また車についても、確かに自転車も日本と比べれば数倍多いと思ったけれど車の量もかなりありました。一番それを強く感じたのは上海でした。高いビルが建ち並び、多くの車が走る、まるで日本の大都市を思わせる光景でした。

そしてこの訪問で一番感じたことは日本と中華人民共和国との生活習慣の違いです。その中でも何といても一番困ったのはお風呂でした。向こうではホームステイで二日間過ごしたわけですが、その家にはお風呂がありませんでした。勿論シャワーもありませんでした。向こうの人は顔と足だけを洗っているだけでした。ここで一番生活習慣の違いを感じました。

このように困った事も沢山ありましたが、向こうの人は優しい人が多そうで非常に良い国ではないかと僕は思います。今回は生徒として親善のために行ったわけですが、僕はこれからも中国だけでなく、他の国とも今度は日本をひっぱり一人の大人として国と国との友好に貢献していきたいと思っています。そして国際化してしているとされる世界の中で最も進んだ考え方をもてる国際人としてがんばっていきたくと思います。





三月二十六日、ついに中国に行く日がやって来ました。大きな期待を胸に飛行機に乗り込みました。北京には、関西国際空港から五時間ほどで着き、夜の静かな道をホテルへと向かいました。

北京では、明の時代の十三人の皇帝とその皇后の墓のある明の十三陵や、ニュースなどでよく見かけた天安門広場、面積約72万㎡の城中に9999の部屋がある故宮、そしてぼくが一番楽しみにしていた秦の始皇帝が築いた全長約6000kmもある万里の長城に行きました。万里の長城は想像以上に美しい所でその雄大さは、口では言い表せないほどでした。紀元前年221年頃に北方の遊牧民族を防御するために築かれたと伝えられているけど、便利な機械もないこの時代によく築かれたものだと、中国の人々の知恵と偉大さに感服してしまいました。秦の時代より後も長城は改築と修繕がくり返されたと聞くけど、この長城を守り続け、ぼくたちに、その姿を見せてくれた中国の人々に感謝したいです。

次は、高松市の友好都市である南昌市です。学校訪問では、門を入ると生徒全員が手迎えてくれていてとても驚きました。こんなにすごい歓迎をうけたのは生まれて初めてでした。そして、どの学校でも、ぼくたちのために歌やおどりを披露してくれたり、昼食会、夕食会を開いてくれたりしました。中国の生徒とは英語で筆談をしたりして、大いに交流を深めました。言葉の壁はあってもお互いに友達になろうと思えば心は通じるものだと思います。

この後、一番不安だったホームステイがやってきました。でも、すばらしい笑顔で迎えてくれて不安もどこかへ飛んでいきました。ぼくが困らないように、いろいろと気を使ってくれました。友達をたくさん呼んでくれてみんなでカラオケをしたり、楽しい夜でした。わざわざ上海へ行く時に見送りにきてくれたり、ホームステイが一番心に残りました。

最後の二日間は、上海を観光したり、おみやげをたくさん買ったりして日本へ向かいました。

ぼくは、この一週間、国外で見聞を深めたことにより、世界が広がりました。中国の歴史の上で成り立つ今日をひしひしと感じとりました。そして、日本以外の国に友達ができ、一生懸命ががんばっている姿を真のあたりを見て、ぼくもがんばらなければと思いました。

最後に、このような貴重な体験をさせてくださった団長先生をはじめ諸先生方、国際交流協会の方々、中国でお世話いただいた方々の心により御礼を申し上げます。どうもありがとうございました。



高松市立太田中学校 山 地 絢 子



出発前の私には、中国は大きく、そして歴史ある国というばかりとしたイメージしかありませんでした。

中国に着きまず最初に感動したのは万里の長城、唯一、月から見えるといわれている建造物です。同じ黄色人種であり、アジアの仲間が、これを造ったと思うととても誇らしく思いました。それから第3代成祖永楽帝の陵墓地下宮殿は、地下によくこれだけのものを造ることができたとおどろきました。どの建造物をとってみても中国の大きさと歴史を実感することができました。

私は、中国と日本はとても近い国ということ、中国から日本への文化の伝来、ということから、文化の違いは、あまりないだろうと思っていました。

でも、ホームステイで実際の中国を体験し文化の違いを感じました。

生活の中で、トイレ、お風呂、そして同じお箸なのに食事の作法も少し違っていました。

それでも、色々な体験の中で一番心に残ったのは、やはり、ホームステイでした。

最初は、不安が大きく、少し、帰りたいたいとも思いました。でも、それはすぐ消えさりました。

会話は、少しの中国語（これは、漢字を使って）と英語とジェスチャーです。私は、唄を歌ったり、日本の遊びを教えてあげました。そして、中国の遊びも教えてもらいました。

中国の人のやさしさには、びっくりしました。私は、ずっと「謝謝（ありがとう）」と言っていました。

別れる時はすごく悲しくて、またきつときつと会いにこようと思いました。

早朝移動中のバスの中から太極けんをする人々を見ました。広い道路でも信号が少なく、自転車に乗った人がたくさんいたので、車のすぐ近くを自転車が走ったりして、少しあぶないなと思いました。

どの瞬間を思い出してみても、すばらしい体験、思い出です。

中国は雄大ですばらしいと思いました。

このようなすばらしい旅の機会を与えてくれた国際交流協会に感謝するとともに、中国と一緒にいった17人の友達、4人の先生、中国でお世話になった人々にとても感謝しています。

中国親善使節団に選ばれて本当に幸せでした。ありがとうございました。





今回の中国への訪問は、私にとってとても貴重なものとなりました。中国の友だちができたり、初めて飛行機に乗ったり……。ここでは書ききれないほどの新しい、そして、忘れられないすてきな出会いがありました。

それでは、まず最初に、北京で私にとって印象深かったことを二つほど書きます。

まず一つ目は万里の長城です。この長さには肝をつぶしてしまいました。女坂・男坂とに別れていて、私は、景色のよさそうな男坂を選びました。初めのうちは平気でスタスタ登っていましたが、しばらくするとハアハア、息が乱れてしまいました。なにしろ坂は急だし、階段の段差は激しいし……。そのぶん、目的地に着いたときは満足感に満ちあふれていましたが、肩で息をしていました。降りるときは足がガクガク。情けないことです。でも、教科書にも出てくるような遺跡を自分の目で見て、しかも登っている！こう思うと、うれしさが胸がいっぱいになりました。

二つ目は故宮です。このスケールの大きさは、日本では考えられません。一つ一つの部屋を見ると、一週間もかかるそうです。そんな所に、皇帝は一体どんな気持ちでいたのでしょうか。

そして北京をたち、南昌に着きました。次の日からは、早速、中学校訪問、そして期待と不安でいっぱいホームステイ。

いくつかの学校で、英語やパソコン、タイプライターなどの授業を見せてもらいました。

どの授業も日本とは少し違います。例えば英語。みんなイヤホンをつけて英文を読んでいます。机には訳の分からないボタンがいくつかついていました。

それから、パソコンとタイプライターの授業。キーを打つ指の動きは、驚くほど速く、授業中に文字を探しながらしている自分がそれと重なり、ひどくこっけいに思えてきました。

いくつか見て思ったことが一つ、あります。それは、みんな勉強したくて勉強しているということです。だから、授業中無駄話をしたり、後ろを向いたりしている人は一人もいません。情けないことですが、これにも驚いてしまいました。

ホームステイはたった一人でとても不安でしたが、みんな親切だし、日本語を話せる人がいて、安心して泊まりました。二日目は中国の友だちが会いに来てくれて、本当に楽しい時間を過ごすことができました。

こうしてふり返ってみると、友だちはできだし、遺跡もしっかり見れたし、いい旅ができたと思います。また、何よりうれしかったのは、自分の英語が通じたこと！自分の言いたいことが相手に通じる！こんなうれしいことは、ほかにはないでしょう。

これで、私の心の宝物が一つ増えました。またいつか、海外に行ってみたいと思います。



ホームステイ先で



「中国」僕にはまったく無縁の国でした。「少し行ってみたい気もするな」と思ったりする程度の国でした。しかし、縁あって「中学生訪中親善使節」に参加し、中国の土を踏むことができました。そして、この初めての海外旅行で、多くのことを学べたと思います。

北京に着いた翌朝からはわくわくしどうでした。なぜなら、万里の長城、天安門広場、故宮などを見学できるからです。僕個人の初めの目的が、これらを見学することでしたから、胸を躍らせるのはもっともでした。でも。本来の「親善を深める」という大役を忘れていたわけではありません。僕なりに「楽しむ＝親善」という粗末ながらも考えは持っていましたから、大役が果せるよう心掛けていました。そのようなわけで、さまざまな観光地の様子を目とフィルムに焼きつけることに夢中になっていました。

そのように浮かれた気分の中、僕は、あることに気がつきました。中国に対し典型的な考えを持っていたことと、自分自身が鈍感な人間だったというのも原因であると思いますが、僕が、「中国だ!」と心底確信できる所が意外と少なかったということです。それについて多くの感動を与えてくれると期待していたのですが、とても残念なことでした。

でも、ホームステイは期待を裏切ることはなかったのです。まったくの異国の家に一人で二晩も過ごすのですから不安でした。しかし、そんなに心配するものでもありませんでした。ホームステイ先では、主に中国の人たちがとても親切にしてくれ、僕はたびたび遠慮しなければいけないほどでした。いつもみかんをすすめてくれたり、持ち帰れないほどお土産をもたせてくれました。普通に中国に旅行しても体験できないようなことができ、本当に感激しました。英語さえもなかなか通じ合えなかったことが多かったけど、心は通じたと思いました。

そして最後に、中国で僕が思ったりしたことを少々紹介したいと思います。まず一つ目は、列車の旅はとてもよかったということです。窓から望める風景は中国のイメージにぴったりでした。しかし、トイレが一つしかないのが列車の旅の欠点でした。次に、買い物では、いろいろと気がぬけませんでした。中国人の店員はすぐ寄ってきて品物をすすめてきます。そして、物価が安いと聞いてはいたのですが、日本とさほど変わらないんです。うまくまけさしたら半分以下まで下がるのに、僕は定価近くで買ったりして自分がまぬけように思えてきます。また、食事では蛙を食べることができました。肉は美味しいのですが骨と皮も一緒についているので、まさに“こらえてくれ”です。あとはすさまじく激辛の食べ物が多くでてきて、食べ続ければ寿命が縮みそうでした。「中国の人たちはよく毎日食べれるな」と思いましたがホームステイ先の食事は意外に甘く、とても美味しかったのが深く印象に残っています。

僕は、正直いってこの旅での思いをもう少し書きたいのですが、莫大な量になってしまうので残念ですがこらへんでペンを止めようと思います。

その前に、最後になりましたが、引率して下さった先生方、高松市国際交流協会の皆さま、そしてこの旅で知り合ったみんなに心からお礼を申し上げます。謝謝。

そして……………See you again !



上海での最後の晩餐にて

機内から拍手が湧き起こったのは北京空港に「CA922」が無事到着した時のことでした。外は既に暗くなっており、ひんやりとした風が僕の頬を撫でたので、やっと今までとは違う気候の土地にやってきたことが実感となって表れました。



翌日の朝、ホテルの窓から外を眺めるとそこには中国がありました。北京市だけでも四国ぐらいはあるというのだからその大きさには圧倒されてしまいます。

初日の万里の長城に始まり、そのスケールの大きさと大胆さ、ち密さには日本では考えられないだけに感心したり、口が開いたままになったり溜め息が出たりしたのもしばしばでした。

そして、小さな時から人見知りする僕にとって最大の難関は今年二日になったホームステイでした。最初ホームステイ先の張君（十二才）と会ったのは南昌市第二十二中学校ででした。

夕食会の後、とうとう僕らはそれぞれに分かれて家に向かうことになり車へ乗り込みました。マンションの三階にある張君宅に着くと、まず僕を泊めてくれる部屋に案内されました。けっこう広い部屋でしかもきれいで大きいベッド。中国の人は客を大切に扱おうと、聞いてはいたものの、さすがに自分がその立場になると非常に感激しました。そして張君の友達劉君（十六才）とも会いました。そして洋風にいえばリビングルームのような所に座らされました。そこで聞いたものは……

な、なんと石川さゆりの「津軽海峡冬景色」だったのです。驚くと同時に、張君や劉君が日本の事を好きだという気持ちが分かって嬉しくもなり、なぜだかホッとしました。

中国の人達はとても積極的、かつ親切でした。寝るのも惜しくなりましたが、また明日も泊まれるという事でなんとか寝付きました。

翌日のホームステイ、玄関の前には、ものすごい数の靴がありました。劉君と一緒に驚きながら家に入ると、張君の同級生がたくさんきていました。しかも一人一人が僕にプレゼントをくれたのでトランクも一杯になってしまいました。その友達とも会話（中国の生徒はみんな英語が上手かった）が弾み、別れるのは非常に哀しいことでありました。

このように、訪問先、ホームステイ先の全てで、僕はその場所を去る事を残念に思いました。それほど中国の地、人は魅力的であったのです。

最後に、今回の研修旅行を計画して下さった国際交流協会の方々はじめたくさんの人達には大変お世話になりました。その全ての人達にお礼を申し上げたいと思います。高松の16人、また会いましょう。



追伸 僕の制服のボタンはあのままです。

